



ナゴヤ市民の友

広報

第803号毎月1日発行

2017年(平成29年)

12月

市の人口と世帯	
※()内はうち外国人	
2017(平成29)年10月末現在	
総人口	323,173(4,212)
男	156,632(2,322)
女	166,541(1,890)
世帯数	150,435(2,870)

発行 那覇市

〒900-8585 那覇市泉崎1丁目1番1号

☎(代表)867-0111

印刷 丸正印刷株式会社

配布 那覇市シルバー人材センター

誤解と偏見に苦しむ人のために ～HIV、エイズを知ろう～

HIV（ヒト免疫不全ウイルス）は感染すると免疫力が低下し、健康な人であれば何ともない菌やウイルスで様々な病気を発症します。病気を発症した状態をエイズ（後天性免疫不全症候群）といい、かつて不治の病と思われていましたが、現在は治療法の確立により死亡率が1%以下になりました。

「エイズだと知ったとき、そのまま自分は病院で亡くなるんだろうと思いました」

YさんはHIV/AIDSを知ったとき、そのまま自分は病院で亡くなるんだろうと思いました。

「エイズには刺されるな」、「大皿に盛った物ではなく個別に取り分けて食べて」など。また、親しい友人が「トイレの後は必ず殺菌」、Nさんは「虫には刺されないでくれ」と言われ、HIVへの誤解と偏見の根強さに呆然としました。

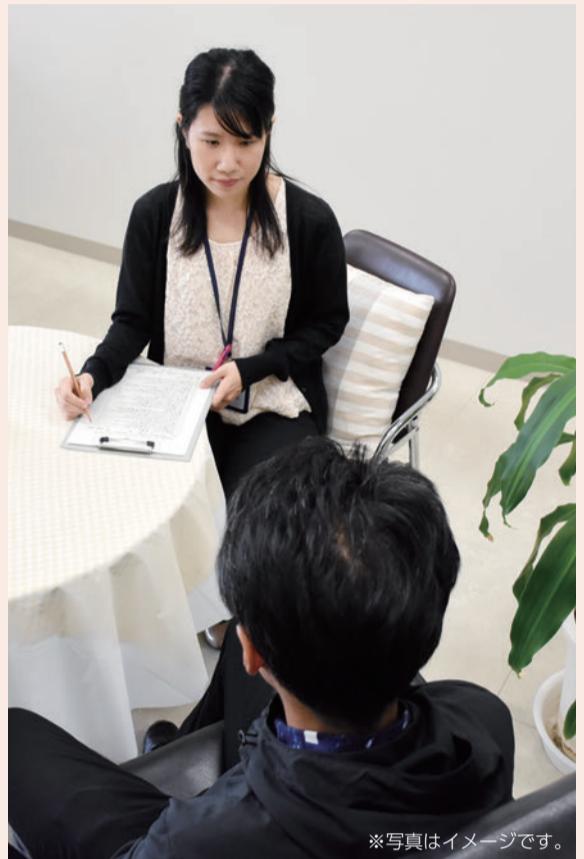
Nさんは、若者の間でのHIV感染拡大を抑えるために、家庭での性教育の必要性を感じて、正しく知り、予防する

早期発見、早期治療と継続によりHIV感染者はエイズの発症を防ぎ、感染していない人と同じような生活を送ることができます。しかし、病気に対する誤解から生じる理不尽な差別や偏見に苦しむ人は少なくありません。HIV感染者として日常生活を送るお二人にお話を伺いました。

「エイズだと知ったとき、そのまま自分は病院で亡くなるんだろうと思いました」

HIV感染を知ったとき、その知識がなかつたNさんは死を覚悟しました。Nさんが治療に前向きになつたのは、合併症で脳に悪性リンパ腫ができた時です。医師からは生存率は40%と告げられました。死ぬのだと思ひ込んでいたNさんは40%も可能性があるのかと驚き、生きたいと考えるようになりました。

本人とは対照的に表情の暗い生存率を告げられています。医師から更に低く向かってきました。自分を気遣い、伝え方を選んでいてくれたのかもしれません。退院後の生活を支援してくれた家族ですが、病気への無理解に傷つけられることがあります。Nさんは振り返ります。



※写真はイメージです。

Yさんの感染が発覚したのは、パートナーの発症がきっかけでした。体調を崩したパートナーは、病院へ行く勇気が出ず先送りにしていました。しかし歩行もおぼつかくなり、病院を受診。糖尿病という診断を受け、2人は安心しました。心のどこかで、HIV感染を恐怖に思っていたからです。

しかしその後も病状は回復せず、結果、HIV感染が分かりました。Yさんも自身の感染を知りましたが、パートナーの看病に追われ、職場や家族には言えず、精神的に追い詰められていました。

YさんはHIV/AIDSを「正しく恐れてほしい」と考えています。誤ったイメージを元に無闇に恐れるのではなく、正しい知識を元に予防することができます。HIVは感染したらこの世の終わりというわけではありません。排斥する対象でもないはせん。排斥する対象でもないはずです」と真摯な眼差しで語りました。

「HIVは感染したらこの世の終わりというわけではありません。排斥する対象でもないはずです」と真摯な眼差しで語りました。

「HIVは感染したらこの世の終わりというわけではありません。排斥する対象でもないはずです」と真摯な眼差しで語りました。